

万葉の川心

元横浜市立子安小学校 教諭 澤井園子

吉野の宮に幸しし時に、柿本朝臣人麿の作れる歌

(巻第一 三九番歌)

山川も 依りて仕ふる 神ながら
たぎつ河内に 船出せすかも

もう二十年以上暮らしている家を、改めて見つめる機会を得た。押し入れ引き出し、タンスに食器棚・・・いつか使うかもと思って取り置きしていた物たちは、結局忘れ去られていた。探していた物が出てくることもあった。それも、なぜここに・・・という意外な場所から。座敷童か真つ黒くろすけか。自分の家なのに、ミステリーワールドになってきた。開かずの扉を次々と開いていく。

掃除には不思議な力がある。知らず知らずに心にたまった老廃物も一緒にゴミ袋に入っていく気さえする。古から「けがれ」は「気枯れ」といい、パワーが失われた状態のことをいうのだが、一つひとつに感謝しつつ手放していくと、家に隙間が出来ていく。すると、その隙間が新しい力で満たされていく。無くしたのに満ちる不思議。そして、大切なものだけが残されていく。それは、神が宿るといふことにつながるのかもしれない。

「山も川も一つとなって奉仕する現人神は神そのものとして、激流ほとばしる河内に船をお出しになることよ。」

河内は、河に包まれてある地の総称である。この歌は反歌であり、その前の歌では、「山の神が貢ぎ物を持ち、川の神は食料を奉仕する」というので、滝



群馬県高崎市
上信電鉄 高崎商科大学前駅側

の上流には鵜飼いを催し、下流には魚を捕るとて網を渡す。山も川もこぞつて天皇の御世にお仕えする」という歌が詠まれている。これを受けた歌で持統天皇の吉野行幸中に柿本人麻呂が詠んだ。時代という激流の中、船を出さねばならぬこともある。人々の祈りを一身に受けて、難しい航海に出なければならぬこともある。人は皆、だれかを幸せにするために動き続ける。人は一人では生きられない。だから、自分の出来ないことをだれかに頼り、自分の出来ることをすることでだれかの喜びになる。がんばらなくても、「生きていく」それだけでいい。

写真の歌碑は、群馬県高崎市根小屋町、上信電鉄の高崎商科大学前駅のすぐ側にある。石碑は、詠んだ歌人の想いと、それを大切にしてこの地に残そうとした建立者の思いを後世に伝える。そして、この碑を訪ねてきた旅人の感慨も石に染み込んでいくのではないかと思うのである。

欠けた月がまた満たされるように、失ったものが大きくても、時を経てまた何かで満たされていく。暗く冷たい冬が長く続いて、また春が来るように。山も川も、すべてが欠けてもまた満ちていく。日々の暮らしの中で、この世はそのように出来ているのだと信じ続けたい。